

申請者	学科名	看護学科	職名	教授	氏名	杉村寛子 印
調査研究課題	家庭内の「第三者」 ～文学に描かれる日本の女中と英国の住み込み家庭教師（governess）の比較（1）					
交付決定額	100,000 円					
調査研究組織	氏名	所属・職		専門分野	役割分担	
	代表	杉村寛子	保健福祉学部看護学科 教授	19世紀英文学	文献渉猟, 統括	
	共同	該当なし				
調査研究実績 の概要	<p>当該年度は、日本の女中の歴史とフィクションに焦点を当てて研究調査を行った。調査の柱は以下の3本になる。</p> <p>①日本の社会の中で長期にわたって存在していた女中について文献研究を通して明らかにする</p> <p>②日本文学の中で「女中文学」というサブジャンルを形成している、女中を主人公ないし語り手に据えた作品を資料として掘り起こす</p> <p>③実在の女中が文学作品の中でどのように表象されているのかを文献研究を通して明らかにする</p> <p>*英国の住み込み家庭教師に関しては次年度以降の課題としたい。日本の女中に関してだけでもかなりの文献資料を渉猟していかねばならないため、継続課題として次年度も引き続き、取り組んでいきたい。</p> <p>①女中に関して渉猟した資料 清水美知子『〈女中〉イメージの家庭文化史』世界史思想社（2004） 坂井博美「女中雇用と近代家族・女性運動 一九三〇年代日本を対象として」『歴史評論』722号（2010） 小泉和子『女中がいた昭和』河出書房新社（2013）</p> <p>女中の歴史は江戸時代にまで遡る。他家に入り奉公することから端を発した女中は、元々貧困家庭の女子のための「職業」という訳ではなかった。むしろ女子には十分な教育の機会がなかった状況から、礼儀作法や家事見習いなど、ある種の教育を受ける手段と見なされていたようである（花嫁修業）。そのため、女中部屋を与えられ、食事は同席とはならずとも、準家族の扱いを受けるという家庭の中で特異な性格をもつ存在であった。近代に至り、第二次世界大戦後までは裕福な家庭のみならず、一般的な家庭においても女中は女主人を補助する重要な役割を果たしていた。むしろ、職業としての家政婦と同一視さ</p>					

<p>調査研究実績 の概要</p>	<p>れ始めたのは戦後のことで、その頃には住み込みという特徴は消えつつあった。このように、女中のもつ意味合いは時代とともに移り変わり、その家庭内で果たす役割も変化していったが、ここでは主に明治、大正、昭和初期に限った女中の実像に焦点を絞り、彼女たちが日本の小説のなかでいかに描かれているか探ることとした。</p> <p>②日本における女中を登場人物とした小説</p> <p>少女小説や大衆文学の代表と言える吉屋信子の作品には、当時の日本の家庭事情を反映して、女中が登場している。ほぼどの家庭においても女中は当然の存在であったとも言える時代において書かれた吉屋信子によって書かれた2つの小説『三つの花』（1926）と『夫の貞操』（1936-7）にも女中が描かれている。吉屋の描く女中は、女主人を助け、けなげに働く女中であるが、これとは対照的に例えば志賀直哉による「大津順吉」（1912）では女中の描かれ方はまったく異なる。彼ら男性の描く女中にはセクシュアリティの対象としてみる男性の視線が存在し、主人と女中との間の性的な関係が作品のテーマとなっている。まだまだ当たらねばならない「女中文学」のカテゴリに入る作品が多くあるが、今回当たただけで女性作家と男性作家の間でこのような差異が認められたのは興味深い。英国では『パミラ、あるいは淑徳の報い』<i>Pamela; or, Virtue Rewarded</i> (1740) という作品、召使いのパミラはその美貌ゆえに主人のB-氏に言い寄られ、純潔の危機に曝されるのだが、これも同じくサミュエル・リチャードソン Samuel Richardson という男性作家によるものである。かなり最近になるが、中島京子『小さなうち』（2010）には吉屋と同じ雰囲気をもった女中「タキちゃん」が登場する。家族の一員のような扱いを受け、またタキ自身も「時子奥様」に強い忠誠心を抱いている。時子の不倫を絡ませ、セクシュアリティの香りを漂わせているが、しかし、タキ自身が主人からそのような対象として見られているわけではなく、タキは専ら時子を観察し、見守る脇役である。一方、終戦の混乱から社会が落ち着きを取り戻しつつあるが、それまでの階級意識が薄らいでいる時代を舞台にした水村美苗『本格小説』（2003）は女中を語り手として起用しながら、女中という表象を能うる限り利用した興味深い作品である。女中という家庭において周辺にある存在が、小説の中でもまた傍観する語り手として登場することで生み出される印象が、女中文学のなかで受け継がれているセクシュアリティによって覆され、読者を欺いている。小島信夫『抱擁家族』（1965）では、脇役ではあるが、「みちよ」というまた別のタイプの女中が存在感を示している。</p> <p>③表象としての女中</p> <p>古川裕佳「女中という装置- 志賀直哉「大津順吉」・里見弴「君と私と」・佐藤春夫「或る男の話」」国文学論考 (46), 1-16, 2010-03 都留文科大学国語国文学会</p> <p>古川の論文では、女中が性の対象として男性登場人物に意識されていることが論じられている。このように女中というモチーフの用いられ方は男性作家と女性作家によって異なることがあると②で確認したが、女性作家である水村の作品の女中は、『嵐が丘』を下敷きにしていることから、家政婦ネリーと女中の土屋富美子の重なりをも利用した、より複雑な存在になっている（これについては成果資料目録欄に記載の拙論に詳しい）。女中の表象としての用いられ方は時代を反映していること、また作家の性差も映し出されている傾向にあるため、登場人物の女中たちはそれぞれに作品のなかで、自立した存在であったり、無力な男性の餌食と化していたりしている。女中という他家での家事を全般とする奉公をする者という定義からすると、英国におけるカウンターパートはメイドや家政婦かもしれないが、家族との近さという点からすると、英国の家庭教師と比較対照させる方が適切かもしれないと考え、スタートさせた研究であるが、次年度以降はその妥当性も検討しつつ、日本の女中ないし女中文学についてももう少し文献検討を行なっていくべきだと思った。</p> <p>継続研究課題であるため、上記は途中経過の報告となることを申し添えたい。</p>
<p>成果資料目録</p>	<p>紀要論文「水村美苗『本格小説』試論：本格小説を語る『本格小説』」岡山県立大学語学センター紀要13号（別添資料）</p>